

「『雑草型』幼児教育人材育成」プロジェクトの意義と実践の試み

小畑千晴* 安久津太一* 山本孝司*

要旨：保育者養成を担う子ども学科では、自然資本を社会基盤に据える発想を学び、予想不可能な時代に必要な文理の壁を越えた人材育成を目指す「『雑草型』幼児教育人材育成」プロジェクトを2022年4月より始動した。自然資本の重要性を幼児期の子ども達や保護者にも教え、伝えられることを目指すとともに、自然環境の循環を学ぶことが、人と社会との関係、人間関係の理解にも繋がることを体験的に学ぶためである。そのための具体的手法の1つとして、アメリカ発祥の体験的かつ横断的学習手法である Edible Education を導入し、試行的取組を行った報告である。

キーワード：雑草型、幼児教育、Edible Education

1 「『雑草型』幼児教育人材育成」プロジェクト

子どもたちが生きる未来社会、すなわち VUCA 時代は、今までの生活社会経済は大きく変化し通常概念が通用しなくなり、新たな社会ルールや理念を模索しなければならない。内閣府によると¹⁾、Society 1.0 の狩猟社会、Society 2.0 の農耕社会、Society 3.0 の工業社会、Society 4.0 の情報社会を経て、今日 Society 5.0 の超スマート社会への移行期に相当している。内閣府のホームページによると Society 5.0 に関して、「IoT で全ての人とモノがつながり、新たな価値が生まれる社会」、「イノベーションにより、様々なニーズに対応できる社会」、「AI により、必要な情報が提供される社会」、「ロボットや自動走行車などの技術で、人の可能性がひろがる社会」という具体的な社会像が示されている。そしてこのような社会は、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を了知する、人間中心の社会」であると説明されている。

これに対応する形で文部科学省（2018）は、学校教育に関し、Society 3.0 と Society 4.0 にまたがる段階を学校バージョン 1.0（「勉強」の時代）、Society 4.0 から Society 5.0 への段階を学校バージョン 2.0（「学習」の時代）とし、Society 5.0 実現に向けた段階を学校バージョン 3.0（「学び」の時代）と位置づけている。Society 5.0 に向けた教育を推進する立場では、

「勉強の時代」の学校教育は、あらかじめ企画化された教育内容を勤勉さでもって正確に習得するという性格から、常識があり、組織の規範や指示に従い、与えられた役割をミスなく果たせる力が求められる 20 世紀の工業化社会には適していたが、21 世紀を迎え「第四次産業革命（Indusrie4.0）」²⁾と呼ばれる今日、求められるのは「技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材と、それらの成果と社会課題をつなげ、プラットフォームをはじめとした新たなビジネスを創造する」力であり、「勉強の時代」のように「出来合いの問いと答え」を学ぶことから脱却する必要があると主張される。近年、文部行政では、いわゆる「3つの柱」が掲げられている。すなわち、「学びの成果として、生きて働く「知識・技能」だけでなく、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」を身に付けていく」ことがめざされている（文部科学省、2016）。

このような状況下で、専門人材を育む大学では、人文・社会科学の「知」と自然科学の「知」との融合により、あらゆる分野の知見を総合的に活用し、社会課題への的確な対応を図る「総合知」の創出と活用が極めて重要である。岡山県立大学は、人間・社会・自然の関連性を重視する実学を創造し、地域に貢献する教育理念を掲げ、豊かな感性と未来社会

* 岡山県立大学 保健福祉学部

に役立つ技術を身につけることを教育目標と掲げ、2020年度から雑草型人材育成を目指す「吉備の杜」創造戦略プロジェクトが文部科学省「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」に採択された。「雑草型人材とは雑草魂のみならず雑草のごとく、変化する環境への柔軟さと適応力を持ち合わせた人材」を意味し、Society5.0を生きる若い世代に、雑草のようにしなやかな適応力を持ち地域に貢献できる学生を育成することをねらいとし、これからの時代を生き抜くための、情報と感性、そしてそれらの知識を繋げるために、学生の様々な現場におけるPBL演習を重視した取り組みを行っている。

こうした中において、保育者養成を担う子ども学科では、自然資本を社会基盤に据える発想を学び、予想不可能な時代に必要な文理の壁を越えた人材育成を目指す「『雑草型』幼児教育人材育成」プロジェクトを2022年4月より始動した。自然資本の重要性を幼児期の子ども達や保護者にも教え、伝えられることを目指すとともに、自然環境の循環を学ぶことが、人と社会との関係、人間関係の理解にも繋がることを体験的に学ぶためである。そのための具体的手法の1つとして、アメリカ発祥の体験的かつ横断的学習手法であるEdible Education (EE)を導入した。以下、その内容について説明したい。

2 Edible Education とは

Edible Education(EE)とは、1995年にAlice Watersがカリフォルニア州バークレー市の公立中学校マーティン・ルーサーキングジュニア中学校の校庭に学校菜園を創造するプロジェクトに端を発する先進的食育プログラムである。食を通じて生命や自然のつながりを体験的に学習することに加え、教科横断的な食育プログラムとして全米の公立小学校を含む、多種多様な教育機関に普及し発展している。

食育における日本の取組は、偏った栄養摂取、朝食欠食など食生活の乱れや肥満・痩身傾向など、子どもたちの健康を取り巻く問題に対し、食の知識と食習慣を身に付けることを目的に実施されている(農林水産省食育基本法, 2015)。他方、EEは、エディブル・スクールヤードを子どもたちの学びの手段と位置づけ、ガーデンでの菜園づくりと収穫された作物とその調理、最後に食すことと教科教育が繋がりをもちながら進められている。従って学びの場が、教室とガーデン、調理室のそれぞれにある。

これらの授業担当は、教員だけでなく、外部団体と連携して実施され、ガーデンティーチャー、シェフティーチャー、プロフラムコーディネーター等の専任スタッフを置き子どもたちの指導に当たっている。日本での食育は、栄養教諭による指導が一般的であり、食育の目的と方法が大きく異なる。

EEの効果としては、「自然への畏敬の念」「共感性・思いやり」「忍耐と自律心」「体験を通じた食の学び」、そして「地域コミュニティとの繋がり」があると指摘されている(吉村, 2014)。

3 国内におけるEEの実践例

国内では、2016年より東京都多摩市立愛知小学校、2017年には近江八幡市立島小学校に導入され、2022年、東京日本橋・茅場町ビルの屋上に、企業と連携したアーバン・コミュニティガーデンが開始された。

大学での取り組みとして報告されているのは、2015年、2016年に追手門学院大学地域創造学部の授業内での実験的取組みである(今堀, 2017)。大学に隣接する畑で作物を育て収穫、キャンパス内で食べられる植物と有毒種のマッピングを行うとともに、一泊2日のサバイバルキャンプを実施している。この体験を通じ、EEの大学への導入は、周辺教育機関との連携と、地域と連携した教育が可能になるとともに、異世代間交流、シニアの居場所、活躍の場の提供、子ども食堂の開設や食育の実施など、地域と学生への幅広い教育効果をあげることができると結んでいる。

国内の取組は、EEの食を学びの中心とするEEの基本的な考えを踏襲しているが、我々の研究チームでは、食だけでなく、本学の自然キャンパスを中心とした自然資本を学びの中心に据えている。不確実性の高い未来社会を生き抜くためには、柔軟な思考力と適応力が必要であり、その力の涵養には、文理の壁を超えた「総合知」が必要である。EEの教科横断的な教育手法は、まさに総合知獲得のための有効な手段であると考えられる。

4 岡山県立大学でのEEの実践

国内外で広がりを見せるEEを、部分的に導入し、2021年冬よりガーデンの準備が進められた。ガーデンの植栽計画と栽培育成の実施を試行的に行った結果を報告する。

岡山県立大学は、キャンパスの敷地は約30ha(建

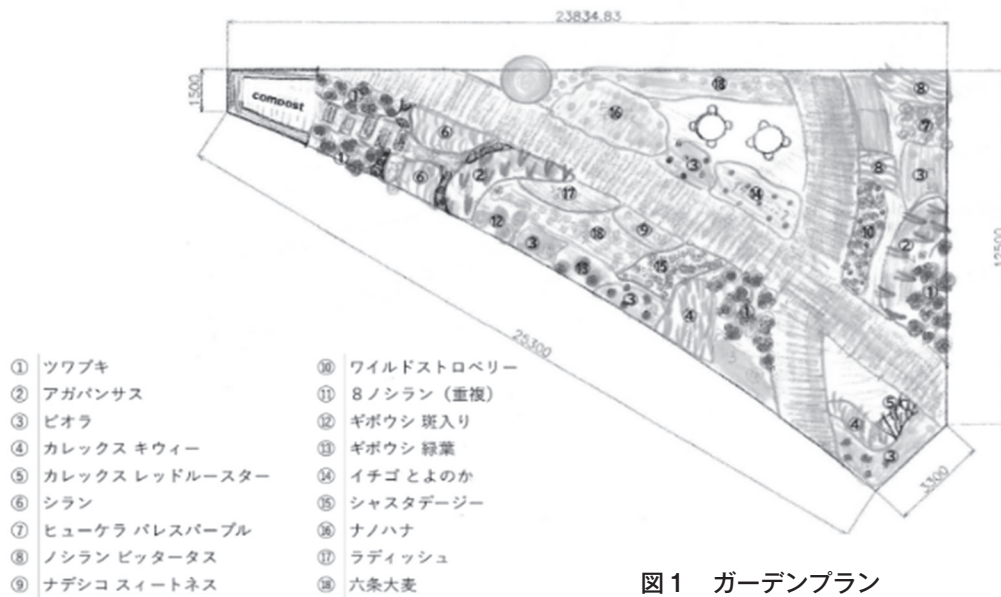


図1 ガーデンプラン

造物 13ha を含む) で、1993 年の設立時に植物生態学者の故宮脇昭教授が、土地本来の潜在自然植生の樹木を中心に、多数の種類 of 樹種を混ぜて植樹する「混植・蜜植方植樹」を実施した場所である。30 年を経た今、広葉樹林が定着して安定した里山の景観を呈し、減農薬で管理されているので、人里植物や雑草が多く、野鳥や昆虫類の飛来も多くみられる生物多様性が維持されている。

この広大なキャンパス敷地の一角にある校庭を「ガーデン」に活用する許可を得て、エディブル・スクールヤードの要素を取り入れた授業を試行した。2021 年筆者らが担当する授業「基礎ゼミ」の一環として、EE を実践する特別講師からの指導のもと、プロジェクトを進めた。1 回目は、「土と畑の話」として土の成り立ちと性質、海外のガーデンと日本の畑の違いについて、そして保育を学ぶ学生がガーデンを作る意義について講義を行った。

2 回目は、学生たちとともに、誰のためのガーデンにしたいのか、どのようなガーデンにしたいか、そのためにどのような花や苗を植えたいか等、イメージコンセプトとそれを実現するために必要な物についてディスカッションを行った。学生から提出された意見やアイデアを集約し、一つのプランとしてまとめた (図 1)。学生たちは、このガーデンを「県大に訪れる人・親子・そして私たち学生のために」「カラフルできれいな」「食べられる」ものがある

ガーデンとして意見がまとめられた。

イメージコンセプトを踏まえ、3 回目はプランに基づいて実際に花を植える作業をおこなった。その後、授業としては終了したが、自主的な参加として、枯れた植物をまとめ、学内のコンポストに移す作業を行った。その後春まで、本授業を受講した学生が、ペアで定期的に水やりを担当した。この授業を受講した学生からの声として、「家で植物を育て始めるようになった」「二人ペアで水やりを通して、ガーデンのことだけでなく、お互いのことを話すようになり、関係が深まった」等、植物への興味関心と、互いの人間関係の理解促進にもつながる感想が寄せられた。数回の実施であったが、自然への興味関心、仲間との共感性の萌芽がみられた。

5 今後の展開

本子ども学科の強みの一つが、上述の広大な自然環境を有する岡山県立大学キャンパスにおける EE の実践になるだろう。閉ざされた教室や、専門の壁を超えた、活気ある学びを提供し得るのが、雑草型幼児教育人材育成の意義と実践の試みであると考えられる。五感とのつながりを学術的にも一層深め、理論と実践の連関を図る試みも進めたい。

一例として、教育学の理論の一つに、ハーバード大学のハワード・ガードナーによる『多重知能の理論』(Multiple Intelligence) がある (池内, 2014)。

人の知性はIQで測られる知能のように画一的ではなく、実際は複数の知能が複合的に凸凹を持って存在する、と示している。多重知能で列挙されている具体的な知能としては、言語や数論理、音楽や空間認知、身体運動、博物や自然的知能まで多岐に亘る。そもそも学際的な特徴を有するEEの学術的な裏付けとして、同理論との連関を探索することも本研究の今後の展開の可能性の一つである。

一方で、理論と、現場における実践の連関や乖離を意識することも重要と考えられる。上述のMIに例を見る先進的な教育学の方向性が、アメリカ合衆国では公立の学校園でも前向きに取り入れられてきた経緯があるが、2001年以降、学力の底上げを目指すトップダウンの教育改革や政策の転換により、MIの普及にはブレーキがかかった点にも留意が必要だろう。同じ米国で産声を上げたEEだが、現在の公教育や政策の中で、どのように捉えられ、実際の教育現場に位置付けられているか、注視しつつ検討を加えることも、本邦におけるEEの実施に示唆を与えられると思われる。

最後に、幼児教育の分野においても、EEの研究の意義は大きいと考えられる。特に『幼児期の育てほしい10の姿』との関連性に着眼すべきだろう。文部科学省(2012)は、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」において、「幼児の発達や学びの個人差に留意しつつ、幼児期の終わりまでに育てほしい幼児の姿を具体的にイメージして、日々の教育を行っていく必要がある」と指摘し、幼小接続の具体的な取り組みを進めていくことの重要性を掲げている。日本の法令には「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園・保育要領」の3つがあるが、2017年の改定に伴い、小学校就学前の姿を想定した「幼児期の終わりまでに育てほしい姿(10の姿)」が示された。10の姿には、(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量・図形、文字等への関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現がある。EEは、10の姿全てに働きかける可能性を有しており、例えば食を環境や健康として細分化、専門分化して扱うのでは無く、総合知として捉えることがEEに内在する特色だろう。幼児教育におけるエディブル教育の活用

は、これらの方向性から有効・有用であると考えられ、子ども学の体系的な研究に位置づけていく必要がある。

今後の課題として、既に始まっている世界的な食料危機は、日本にもやがて訪れることを見据え、それに備えるために、学生たちにガーデンでその植物(野菜)の育て方、扱い方を教え、それらを次の世代の子どもたちに教えられるようになることを目指し、本学での教育実践に取組みたい。

謝辞: プロジェクト実施に際し、ご協力いただいたエディブル・エデュケーション岡山研究会田辺綾子氏には、こころより御礼申し上げます。

注

- 1) 内閣府「第5期科学技術基本計画」(平成28～平成32年度)平成28年1月22日閣議決定。
- 2) Society5.0は、日本の提唱する未来社会のコンセプトの呼称であるのに対して、「第四次産業革命」は2011年にドイツ政府によって産業界とともに推進している、次世代のハイテク技術活用による大規模な産業改革プロジェクトの呼称で、世界的にこの用語が用いられるようになった。

引用文献

- 池内慈朗(2014).『ハーバード・プロジェクト・ゼロの芸術認知理論とその実践』東信堂。
- 今堀洋子(2017). 大学におけるエディブル・スクールヤードの実践と地域創造的な意義, 追手門学院大学地域創造学部紀要, 2, 33-48, 2017.
- 文部科学省(2012) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書(2012/11/11)
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf: 2022年8月1日閲覧)
- 文部科学省(2016) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(平成28年12月21日: 第197号)
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/_icsFiles/afiedfile/2017/09/28/1396716_1.pdf: 2022年8月1日閲覧)

- 文部科学省 (2018) 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会「Society5.0に向けた学校ver.3.0」
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afielddfile/2018/06/20/1406021_17.pdf:2022年8月1日閲覧)
- 奈須正裕 (2017) 『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社
- 農林水産省 (2015) 食育基本法 (<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=417AC1000000063>:2022年8月1日閲覧)
- 吉村春美 (2014). 総合的カリキュラムとしてのエディブル・スクールヤードの可能性の検討—東京都市立A小学校の取組を事例として—東京大学大学院教育学研究科紀要, 54, 514-550.
—一般社団法人 エディブル・スクールヤード・ジャパン (<https://www.edibleschoolyard-japan.org/archives/category/aiwa>2022年8月1日閲覧)
- 近江八幡市立島小学校 特色ある取組 (<https://www.fureai-cloud.jp/shima-es/home/index/torikumi/furusato>2022年8月1日閲覧)
- アーバンコミュニティガーデンEdibleKAYABAEN (<https://tsunagood.net/urban-community-garden-edible-kayabaen/> 2022年8月1日閲覧)

On the adaptability of the Zasso model to the development of a teacher-training program for infant education in a university

CHIHARU OBATA *, TAICHI AKUTSU *, TAKASHI YAMAMOTO *

**Department of Childhood Studies, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University*

Abstract

In April 2022, the Department of Children's Studies, which is responsible for fostering teachers, started the "weed-type' early childhood education human resource development" project, which aims to develop human resources who have learned the idea of placing natural capital as a social infrastructure and who transcend the barriers of the humanities and sciences necessary in unpredictable times. In addition to aiming to teach and convey the importance of natural capital to children and parents in early childhood, this is to learn experientially that learning about the circulation of the natural environment also leads to understanding the relationship between people and society and human relationships. As one of the specific methods for this purpose, we introduced Edible Education, an experiential and cross-sectional learning method originating in the United States, and reported on the trial efforts.

Keyword : Weed-Type, Early Childhood Education, Edible Education